

たり、または、異なるいくつかのプログラムを、それぞれに分けて入れたりすることが、1本のテープでできることになり、小型の計算機の場合、なかなか便利である。しかし、こうなってくると、どうも靴紐という呼名は、あまり適当ではないような気がする。

命令コード表

mS ACC に下から *m* 字読み込め。
mF ACC の前半分を *m+1* 番地へ、後半分を *m* 番地へ移せ。
mI インデクス1を *m* にせよ。
mPI インデクス2を *m* にせよ。

mE ACC の符号ビットが0ならば *m* 番地へ飛べ。
mG ACC の符号ビットが1ならば *m* 番地へ飛べ。
mPE ACC が空白ならば *m* 番地へ飛べ。
mXE *m* 番地へ飛べ。
mXG SCC の値をインデクス1に入れ、*m* 番地へ飛べ。
T 番地部をインデクス2で修飾せよ。
R 番地部をインデクス1で修飾せよ。
Q 番地部を SCC で修飾せよ。SCC は命令の所在番地より1多くなっている。

コボル短 信 (1)*

西 村 恕 彦**

コボル 65 が発表されてから3年ばかり経ち、その改定作業が、アメリカ国防総省データ組織言語協議会で、非常に活発に行なわれている。日本では、ソフトウェア研究会が、国内（および極東）における唯一の組織として、アメリカの動きに追随し、連絡を保ちながら、提案などの作業をしてきたが、研究会が解散されてしまってから、めっきり情報の風通しが悪くなり、意見の交流も低調になった。

それで、本誌の毎号の紙面によって、新しいコボルの情報をお知らせし、問題点を吟味してゆきたいと思う。読者諸氏のご批判やご意見も期待する。

本学会発行の“COBOL 1965年版”の本文は、1968年1月現在のコボルの全容を収めていて、それから7月までの変更点は、付録に項目だけあげてある。

よくご承知のことではあろうが、コボル61以後の、各コボルのおもな変更部分は、次のとおりである。

拡張コボル 61 複数個の答
 分類 (SORT 命令)
 報告書機能 (GENERATE 命令)
 コボル 65 表操作 (SEARCH 命令)
 大記憶 (乱呼出し、乱処理)

そこで、これらより、さらに以後の変更点のうち、COBOL 1965年版に収められたものから解説してゆこう。詳細はこの本を参照していただきたい。

CALL (呼出し) 命令が追加された。これはあるコボル語プログラムから、外部の他のプログラム (コボ

ルであってもなくてもよい) を呼んで実行する。また、LINKAGE (連絡) セクションも追加されたので、外部の他のプログラムから、コボル語プログラムを呼ぶこともできる。

呼び出し方は

```
CALL "PROGRAM-NAME" USING PARAMETER
```

または

```
MOVE "PROGRAM-NAME" TO DATA-NAME
```

```
CALL DATA-NAME USING PARAMETER
```

である。

〔宿 題〕

次の命令群を実行したら、最終結果(COMMITTEE)の内容が空白になった。なぜか。

```
MOVE "COBOL" TO RESEARCH;  
MOVE RESEARCH TO COMMITTEE;
```

次の命令群を実行したら、Aの数値が10倍になった。なぜか。

```
MOVE A TO B;  
MOVE B TO A;
```

次の命令群を実行したら、Cの数値が1/100倍になった。なぜか。

```
MOVE C TO D;  
MOVE D TO C;
```

* COBOL News and Olds (1), by Hirohiko Nisimura (ETL)

** 工業技術院電気試験所